

## 第 35 期小田原市図書館協議会 第5回協議会 会議録

日 時 令和6年3月11日(月)13時30分から

場 所 小田原市立中央図書館2階 研修室

### 1 開会

### 2 文化部長挨拶

### 3 報告事項

#### (1)調べる学習コンクールの結果について【資料1】

○事務局説明(野地副館長)

○質疑応答

〔藤本委員〕 初めてこちらのコンクールの審査員をさせていただき、価値あるコンクールだと思った。学校で募集のあるコンクールというのは、理科的なもの国語的なもの図工的なものに分かれているのだが、こちらのコンクールは文系理系が統合されたような作品を出すことができる。今回市長賞を受賞した脇坂さんは本校の児童であるが、国語の教育から興味がスタートして理科的な要素が入っていてすごく価値のある作品であった。

どれも素晴らしい作品で読んでいて楽しかった。時間が足りなかった。

〔北河委員〕 具体的に聞きたいところがある。2人は友達シリーズの「かえるくんとがまくん」からアイデアを出し、そこに登場したカタツムリが歩いた距離ということなのか。

〔藤本委員〕 話の中に何日間か歩いたというくだりがあり、そこからカタツムリの生態を調べて実際にカタツムリをはわせていた。時間とか時速を測って距離を算出するという内容だったと思う。観察も交えた総合的に素晴らしい作品だった。

〔北河委員〕 これはどこかで見せてもらえるのか。

〔野地副館長〕 展示を中央図書館していた。3月中にホームページで公開する。

〔野口委員長〕 公開は期間限定か。

〔野地副館長〕 公開期間は特に決めていないのでいつでも見れる。

〔野口委員長〕 また来年応募したいという方の参考になると思う。

#### (2)子ども読書活動推進計画の取組状況について【資料2】

○事務局説明(植田副館長)

○質疑応答

〔北河委員〕 家庭における子ども読書活動の推進についての絵本の読み聞かせ講座の開催は親に向けたものか。大人の参加はどれくらいいたか。

〔植田副館長〕 絵本の読み聞かせ講師の上甲先生にお越しいただいて、読み聞かせ講座を1月14日に開催した。26人の参加者、うち大人は19人である。

〔北河委員〕 親御さんが絵本を読むのが得意になると良いと思う。

〔植田副館長〕 「少しでも時間を割いて読み聞かせをしましょう」という呼びかけをご自身の体験談を交えて話していただいた。

- 〔馬見塚委員〕 ティーンズの利用促進事業があったが、ティーンズの定義について教えていただきたい。また、ティーンズを対象としたイベントを具体的に教えてほしい。
- 〔植田副館長〕 中学生から高校生を対象に1月27日に、「本とAI」という進路探検ワークショップを開催した。参加者が選んだ本から進路や就職先などを探索するような内容のワークショップである。また、3月27日にビブリオトークという同世代にお薦めしたい本や心にささった一節を紹介しあうといった内容のイベントを開催する予定である。
- 〔佐次館長〕 補足として、「本とAI」は、図書館として開始した市民提案型のイベントの一つとして実施した。広報で、図書館を使って図書館と共催で何かイベントしませんかという募集をしたところ、AIの仕組みを作っている事業者から提案があった。内容としては、その参加者の興味があるものを入力すると、AI司書があなたにはこういう本が合いますよという提案してくれる仕組みになっている。さらにあなたにはこんな仕事があるといった就職や目標に繋がる提案ができる、ワークショップまでを実施した。
- 高校生、大学生が対象のこれから予定しているビブリオトークだが、読書会を今年度模索しながらではあるが、スタートしている。読書会というと1冊の本をどのように解釈したかというものが多いが、今回は参加者のおすすめの本を紹介してもらってお互いの本への興味関心を掻き立てるような読書会にしたいと思う。3月末に実施する予定である。
- 本だけに限ると高校生だとなかなか難しいので、音楽の好きな歌詞のフレーズや漫画の中のセリフを出して、私はこんなことに興味があるというようなことを紹介しあうワークにしよう準備しているところである。
- 〔馬見塚委員〕 細かいことを申し上げると、先ほどティーンズを中学生・高校生とおっしゃっていたが、英語でのティーンズだと13歳から19歳だが、使われ方が揺れていて10代だと思われる方もいるし、ここはティーンズ対象ですと言われたときに、自分は対象なのかそうではないのか分からない方もいる。そこは明確にした方が良くはないかと思った。
- 本とAIはとても良いイベントだと思う。先ほど見させていただいたが、一箱本棚はとても充実していて良いと思った。
- 〔野口委員長〕 最近では図書館のサービスの領域をさす言葉として、ティーンズとかティーンズサービスという言い方をしている。いわゆる中高生向けサービスを指し示す言葉として全国的には図書館の現場では使っている。かつては、ヤングアダルト(YA)という言葉を使っていたが、ヤングアダルトという言葉の方が何を指している言葉か分からない、図書館の人にしか伝わらないんじゃないかという利用者からの意見もあった。最近ではティーンズという言葉が定着してきている気がする。
- 〔藤本委員〕 3月末の読書会はどれくらいの方が申し込まれているのか。
- 〔佐次館長〕 まだ応募がない状態である。広報だけではなく、Instagramやツイッター(X)などSNS、館内掲示や小さなチラシを作って館内で配布しているのだが、なかなか募集に繋がらないような状況。セッティングはしているが来てほしい

方と繋がることのできない現実に直面している状況である。

〔藤本委員〕

お話を伺ってなかなか難しいという印象を受けた。

今おっしゃっていたことは、学校の授業ではよくやることではあるが、授業であるから行うのであって、希望してという場合は、本当に読書が好きな人たちに限られる、レベルの高いイベントだと感じた。

一方で AI と読書というワークショップは、本だけではなくて、本から自分たちの生活に繋がる内容で、読書にそれほどなじんでない方も参加できるような企画だなと思った。

一つの例として、自分が小学校の教諭で図書委員会をずっとやってきて、すごく子どもたちに人気のあるイベントをいくつかやっていた。手品のイベントである。手品の本はたくさんでいる。そういう本を集めてみんなでやってみるようなイベントをやると、手品の本が爆発的に借りられるようになる。あとは折り紙のイベントなどをするとその本がすごい人気になる。活動を伴ったイベントをやっていくと、小学生だけではなくもう少し下の年齢層の方たちが、こういう本もあるんだ、読書だけではないんだという風に広がっていくのだと思った。

まだそんなに読書を好きではない方にスタートとしてやるものや、読書好きが集まってマニアックに楽しむもの、どこに対象を持ってくるかで、年間でバランスよくやっていくと良いと思った。

〔佐次館長〕

その通りであると思う。AI と読書について言うと、進路に繋がるということで親御さんから参加するよう言われて来たという方が多く、直接的に本や読書が子どもにストレートにささり、子ども自身の意志、意欲で来るというのは難しいのかなと感じた。

今度の読書会についても、本だけに限らず音楽のフレーズだとかそういう風な形に広げていけば参加者も増えるのかなという発想もあったが、なかなかそれでも子どもにはささらない。子ども自身にささるにはどうしたら良いのかというところが今後の課題になると実感している。しばらくは工夫をしながら取り組んでいって、トライアンドエラーでやっていくしかないと思っている。

〔野口委員長〕

中高の図書委員にピンポイントで声をかけるのも一つの戦略だと思う。図書館を利用している学生は勉強を目的で来ている子が多く、読書そのものには関心を持っていなかったりする。図書館側もそう願っていると思うが、そういう子に関心を持ってもらえるきっかけになったら良いと思う。なかなか市の図書館に足を運ばない子も、実は学校の図書室の活動には積極的な子もいるので、そういう子たちをうまく繋げられるアプローチができれば良いと思った。

〔北河委員〕

図書委員にポップを書かせると本当に上手。イベントを知っているのか知らないのか分からないが、声がけすれば、もしかしたら乗ってくる気がする。

〔野口委員長〕

学校の図書室に小さくてもポスターか何かを貼ってみれば、それを見た子が応募してくれるかもしれない。

資料2の時間帯別の電子図書館の閲覧回数で、5・6年生の8時台の利用は朝読なのか。利用の実態の分析はされてるのか。

〔植田副館長〕

細かな統計はとっていないが時間帯を見る限り、朝読だと思う。

- 〔野口委員長〕 逆にいうとそれ以外の子どもたちは授業中に活用しているのか。それとも個人でアクセスしているのか。中学生はトータルの閲覧数が多くないので個人でアクセスしていると思うが、低学年・中学年の子どもたちは授業中に利用しているのか、この辺はとても気になるところだ。学校の更なる利用促進のためにも、この辺は機会があれば分析されると良いと思う。
- 〔藤本委員〕 7月の利用状況が含まれた統計だが、7月は小学校では一度学校の方でログインをする練習をしているので、7月の結果を入れないで9月から1月で統計をとらないと、実際の利用状況はわからないと思う。
- 〔植田委員〕 私には小学校4年生の娘がいて、電子図書館は良いと思ったが、数字をみると伸び悩んでいると感じる。娘は全く学校では使っていないと言っていた。好きな本を持って行って読んでいます。使い方すら忘れてしまったと聞いて、もったいないと思った。実際に操作を教えたのは先生なのか。
- 〔藤本委員〕 そうである。
- 〔植田委員〕 私が教えるということもできなくて、学べる機会があれば良いと思う。操作は簡単なのか。
- 〔植田副館長〕 ログインも簡単で学習用端末と同じパスワードを使っている。ログインをし、本を選んで、読むボタンを押すという操作方法になる。  
また、新1年生向けの ID・パスワードの設定や操作方法と合わせて、改めて各学級に電子図書館の利活用についてを話してもらうよう依頼をする予定である。
- 〔佐次館長〕 実際に、電子図書館の全体利用に占める割合として学校利用は非常に多い。確かに7月は最初のログインということで非常に利用は多いが、7月の利用を除いても電子図書館のデータ利用数でいうと学校で使っている割合が非常に多いと思う。  
学校によって使う学校、使わない学校、使う学年等あるというのは推測できる。教育委員会と相談しながら事業を一緒に進めているという経緯があるので、引き続きどのような形で効果的に使っていけるのか相談しながら徐々に取組の拡大をしながらやっていくつもりである。
- 〔藤本委員〕 情報として、1・2年生は学校でのネット利用はできない状況にある。授業中に個人個人使っていることはない。自宅での利用は可能である。
- 〔野口委員長〕 資料2-1を見ると、佐次館長が言った通り、使ってる先生や生徒が一定数いるように読み取れる。電子図書館が良いと思っている子や先生方は継続利用されてる状況なのが資料を見るとわかる。  
実際に学校の先生たちへ、ログインの仕方や、様々な活用の仕方はアナウンスしているのか。
- 〔佐次館長〕 サービススタート時点で、中学の校長や教頭にこのようなサービスが始まるという案内はした。あとは研修動画を各学校で見てもらい、先生方へは利用方法を知ってもらった。一度そこで知ってもらってからは特段アプローチはしていない状況だ。

### (3)令和 6 年度 図書館事業及び予算の概要について【資料3】

○事務局説明(石塚副館長)

○質疑応答

〔長谷川委員〕 3頁にある図書館サービスの充実の項目で、中央図書館管理運営事業がだいぶ増になっている理由を聞かせいただきたい。デジタル図書館事業が5年度から6年度で予算が減っている理由も聞かせていただきたい。

〔石塚副館長〕 施設の老朽化対策として、エレベーターの改修事業、空調設備のオーバーホールを予定している。

〔佐次館長〕 デジタル図書館事業の中で減ってるのは、電子図書館のコンテンツを購入する経費を落としている。というのも、ネットワーク等運営事業の中で今年度新たに LINE での情報提供サービス開始している。これは、LINE で図書館を友達登録してもらうと図書館の様々な情報が受け取れるというサービス。

また、利用者カードを LINE 連携すると LINE の画面上で利用者カードの番号をバーコードで表示することができる。このようにスマートフォンで図書館サービスが受けれるようになるサービスを開始した。

6年度では維持経費を継続して確保する必要があるので、こういった新たなサービスを展開させる中で、予算的にはやりくりする形でデジタル図書館のコンテンツ費用を減額した。デジタル図書館は学校利用が非常に多い中で、読み放題パックは確保している。読み放題パックなど、子ども向けのものはしっかり維持しつつうまくバランスを取っていけたらと考えている。

〔長谷川委員〕 予算が減ったからと言って品質がさがるわけではなくやりくりされているのが分かった。

〔野口委員長〕 旧保健福祉事務所の跡地の活用の方性は決まっているのか。

〔佐次館長〕 平成26年に文化生涯学習施設用地として取得して、10年間経過しているが、これまで様々な検討はしてきているのだが、まだ具体的には定まっていない状況である。場所的にみなさん関心のある地域で、地域の方の意見やどのようなものがふさわしいのか引き続き検討していく。来年度、総合計画の見直しのタイミングでもあるので、その中で検討していきたい。

### 4 図書館運営のあり方について【資料4】

○事務局説明(佐次館長)

○質疑応答

〔北河委員〕 施設機能の課題に近年は図書館にカフェ機能をとあるが、ここの図書館でお食事ができる場所はあまりに暗い。本を借りて自動販売機でお茶を買って休憩するのは全く考えたくない場所。あまりにも暗いのであそこで読む前に家に帰りたいと思ってしまう。あそこはすごく開拓できると思う。カフェ風にするにはインテリアコーディネーターとかそういう方が入れば、オープンで明るくてみんなが入りやすいところになるのではないかな。入りにくいし、カフェの機能を持っていなくても、自動販売機には色んなものがあるのに、いつ行っても同じで魅力的ではない。時間に余裕があれば、気に入った飲み物があれば少し本を読んで

帰ろうという気持ちになる。カフェ機能を併設しなくても、もっとあそこを開拓して明るくして、色んな人が入りやすく、ちょっと食事ができて、飲み物が選べるというのはすぐにできるのではないと思う。

〔石塚副館長〕 談話コーナーは暗いという苦情があるが、LED球にして照度の高いものに変えてみたが電球の位置が限られているのと、天井が高くなかなか照度が上がらない。日中、日が差しているときは本を読んでいる人はいるが、夜になると暗いという感想は我々も持っている。以前は、音を遮蔽するためにカーテンがあったが、トップライトの明かりが入りづらいので、カーテンも外し少しでも明るくなるよう対応をしている。根本的に照度を上げるには大規模な工事を行わないと照度は上がらないのでいずれ対応は考えたい。

自動販売機については、福祉団体の方が置かせてほしいということで許可しており、我々がこういうものを置いてほしいというオーダーはできない。紙コップの自動販売機は経費がかかり、業者は撤退するとの事で、5月頃には新たな機械が入る予定がある。また、自販機にはついては省エネ効果のあるものに替えてもらうつもりである。

〔佐次館長〕 実際に、北河委員がいうようにあそこをこういう風にすればもっと良くなるのではないかというのは、その通りである。我々もそのような観点でみている。照度を上げるためにはカーテンを外して若干上がるが、さらに上げるには工事が必要だと思う。

コーヒーについても、これまでの経過の中で今の自販機が置いてあるような状況である。どういう風にすればより良いものになるのかという観点を我々も持っている中で、今後引き続きやっていくとすると、大掛かりなことになる可能性がある。すぐにできるものはすぐにやっていく、大掛かりにやらなければならないところは大掛かりにやるというような、ビジョンを持ちながら検討していきたい。一般の方からみても、どうして暗いんだと思う気持ちはよくわかる。図書館協議会はそのような声をいただける場であると思っている。是非ご意見やわからない点は言っていて、現状そういう風な内部事情もあるのだという事をご説明させていただければと思う。

〔藤本委員〕 先ほど北河委員の話を聞きながら思っていたが、ある図書館ではスターバックスが入っているところもあって人気だなと思っている。学校では農政課と協力して校舎の木質化というのを進めている。小田原の良さが活かせるよう、そういったところと相談しながら進めていくというのも、価格を抑える点でも良いのかなと思った。実は非常に窓がない北側は暗くて子どもがいるのに適さないなと思っているところもある。相談していると照明を工夫することで違うという事を言われたので、方法として一つの方角性なのかなと思った。

〔馬見塚委員〕 カフェの話が出たが、人の流れを作っていくという意味では、なかなか図書館単体でやっていくよりも、少し発想を変えて外部の団体さんと一緒にやっていく、人の流れを作っていくのも良いのかなと思う。

例えば南側のガラス張りでけやきが植わっているところも、敷地が広く色々な活用ができると思うので、子供の遊び場を作るとかキッチンカーを呼ぶとか色

んな活用の仕方がある。人が集まる場にできるのではないかと思う。

もう一つは、今後に向けた施設向上の方向性。収蔵量の拡大と言っていたが、書庫の収蔵可能量以上の蔵書があるという状況で、施設の改修あるいは増築が必要であれば早めに結論を出していかなければいけないと思う。いつまでに結論をだしていくのか教えていただきたい。

〔佐次館長〕

収蔵量の話で言うと、今収蔵されているものだけでも、もともとの収蔵可能量よりも増えている。それは集密書架を新たに増やしたりして対応しているが、現実的に旧市立図書館からもってこれていない本もある。これをどうするのかというのが目下の課題である。まだ、どこかをどうにかすれば収蔵量を増やすことができるかもしれない。また、外に収蔵庫を作ることもしなくてはならないかもしれない。まだ方向性は定められていないところだが、いつまでも放っておくわけにはいけないので、しっかりやっていかなければならないと思う。そういった意味では、あり方の中で、図書館としては大事な課題なんだという位置づけをしたのでこれをもって、部内あるいは庁内全体で方向性を作っていきたいと思う。その中では、本の廃棄をせざるを得ない部分もある。何を残して何を廃棄するということもやらざるを得ないところがあると思う。明確に何をどうするかというのは決められていないが、向き合っていくのだということは、再認識、再定義をしたということである。

〔馬見塚委員〕

旧市立図書館はいつまで使えるのか。

〔佐次館長〕

すでに閉館はしており、小田原市全体の施設管理の計画では、令和8年度までに解体することとしているが、令和8年度で壊すのは現実的には難しいかも知れない。しかし、位置づけがされているのは確かなので、期限を意識しながら現実的な解体を見据えて業務を進めないといけない段階である。

〔植田委員〕

前々から中央図書館、南側の広場がもったいないという思いがあった。お子さんに4月5月の暖かい時期に外で読み聞かせができれば、親御さんも一緒に家族でレジャーシート広げて何か食べながら、紙芝居が聞ければというのが理想的だと思う。

折り紙展をここでやっていると思うが、折り紙は奥が深くて、小さい子が簡単に折れるものもあれば、大人も驚くような技術の折り紙もあったり、そういうワークショップの時にこういう本がありますよという風に並べたりして、貸し出しに繋がれたらと思う。

折り紙だけではなくて、私は介護職をしているので、介護のことでわからない時にどういう本を読んだら良いかわからず、ここへ来たがすぐ数が少ないと思った。そういうプロフェッショナルじゃないけれど経験者がイベントして、もっと勉強したい方が集まって、そういう専門性のあるようなイベントをやりながら本の貸し出しに繋がれたら良いと思った。

夏休みに恐竜のイベントをやるのも良いと思う。小さい男の子とかは興味があると思うので、勉強しながら折り紙で恐竜を折りながら、こういう本を読んだらもっと知識が広がるんだという風に、繋がれると良いのではないかと思った。

- 〔大塚委員〕 資料4―7の(1)について、新たな層というのはどのような層なのか今の段階で具体的に考えていることを教えていただきたい。
- 〔佐次館長〕 新たな層と小さくくりで記述させてもらっているが、基本的なとっかかりとしては、市民参画のイベントで図書館に来ていただいた方とは継続的に関わりながら様々な展開を進めていけたらと思っている。例えば、絵画鑑賞が趣味の方が、図書館でイベントやりませんか？に応募をしてくれて、絵画の見方の講座をやった。印象派の講座を最初にやって非常に面白かったので、続いてゴッホをテーマとして第2回をこれから開催する予定である。何かそういう特技だとか、関心をもっている方と継続的にやっていくことで広がりを持たせていきたい。例えば、先ほど話にあった介護の方なども、そういった形で一緒に機会があれば何か展開していけるのだろうと思う。様々な立場の方が関わっていくことで様々なテーマの事業を広げていく、構想でしかないが色々な方たちが集まって、図書館がどのようなになると面白いのか話し合いができる場を設けられると、さらに広がる部分もあるのではないかなと思う。今までのボランティアとしての固定的なところを広げていく、ボランティアというよりは、自分たちがやりたいこと関心のあることを図書館の中で他の人たちに広げていくようなそのようなイメージを持っている。
- 明確にこの層この層という風に明示されているわけではなく、色々なところに関わりを持ちながら広げていくというイメージである。
- 〔藤本委員〕 みなさんの話を聞いていて、夢が広がると思った。小さな子どもが遊ぶような場を敷地内に作れたらという話があったが、すごく賛成だ。資料2で家読(うちどく)の推進という言葉がでてきたが、一番のスタートはそこなんだと思う。おうちの中で、大人が子どもにどれだけ本を読み聞かせて、子どもたちが育ってきているか、本を好きになっていくか、世界が広がっていくかという風に思っている。遊び場が近くにあることで、保護者が袋を持ってここに来て、本を何冊か借りて帰っていく。そういう風に継続が生まれていくと思っているので、お金のかかることなのですぐには難しいと思うが、今後そういった視点を入れていただければそこがスタートだと思う。
- 〔北河委員〕 資料4―7(1)に関係するが、資料2で絵本の読み聞かせ講座に26人来たということで、その人たちはすごく本に興味があるので、継続的に続けてほしい。読み聞かせボランティアさんは高齢化というか、なかなか若い方が入ってこない、それは学校の読み聞かせも同じであるが、読み聞かせの経験がないからどう読んで良いのか分からないというところで躊躇されてしまう。小さいころからお母さんやお父さんに教育して読み聞かせができるようにして、毎日やっていると自然にボランティアの募集があったら参加しそう。育成というか継続的に参加した人に連絡すれば良いのではないかなと思った。
- 〔大塚委員〕 前回の図書館協議会の際に伝えたつもりだが、教育委員会つまり小中学校と市立図書館が連携していくような今後の展開が私が見た中では資料に入っていない気がする。
- 〔佐次館長〕 図書館運営のあり方というのは、市立図書館の組織運営をしていく上での、立



脚点というか、よりどころになるものである。

学校連携というのは子ども読書の推進活動計画の中に、位置づけており、今回のあり方は施策全体を落とし込んだものではない。この中には、学校図書館との連携の内容は盛り込まれていないが、それは施策的な動きであり、読書計画の中に位置づいているので、その中で進めていくということになる。

〔野口委員長〕

公立図書館は広く捉えれば、社会教育の事業ということになる。市内の社会教育の取組が別途あるが、そのようなところでコラボすることで新たに展開できるサービスが広がるような気がする。そのあたりは内部の取組として是非、ボランティアさんや市民提案はすごく重要だし、すごく可能性を持っていると思いながら話を伺っていた。既存の社会教育事業とコラボしていくとか、そういうことで広がっていくということもありうるのではないかなと思う。

2点目が、色んな取組をして行く中で近しながら、今回は中央図書館のあり方ですので、中央図書館に多くの市民にお越しいただきたいとなった時に、東口図書館は色んな取組・事業・催しをしているがそことの調整は必要だと思う。同じようなことをやっても、アクセスが良い方に行ってしまうかもしれないので、その辺の調整も視点としては必要になってくると思う。

最後3点目は、どなたからでもご発言なかったのですが、一方で県内でも非常に長い歴史を持ち、そして蔵書豊かな小田原の図書館の特色でもある地域資料。整理して利用者の方が個人的に活用していただけるように、環境を整えるという事も重要ですが、図書館としての組織的活用というか、地域資料を使って本を作っていたこともあるので、市民に図書館としての地域資料を活用して小田原はこんなに魅力的な地域資料を持っているというアプローチをすると良いのではないかな。活用という視点で何か取組を進めていくと、実は市民の方も地域資料の魅力に気づいてない気がするので、一つはデジタルの活用というのがもちろんあると思うが、もう一つはアナログベースだが、みなさんが言っていた催しとか講座とかそういう話もあるが、地域資料の魅力を学ぶような講座を開くのはどうか。講師は図書館員が務めて良いと私は思う。それはなぜかと言うと、資料を知り尽くしているのは図書館の人たちなので。そういう講座を市民向けに開くとか、あるいは展示を、先ほど言った社会教育の市内の他の施設で誰でも利用できるパネル展みたいなものを図書館でやっても良いが、それ以外の施設に出張して展示をしてみるとか、小田原が非常に魅力的な地域資料をたくさん持っている、それが実は他市から見ても小田原の特徴的なところだということを、市民の方にまずは知ってもらうことも大切で、活用の一つの形ではないかなと思う。

〔佐次館長〕

東口図書館と、合同選書会議をしたり、計画的な蔵書構成を図っていくということは始めている。一緒に仕事を始める中で、最初考えていたのは東口図書館は軽いもの、中央図書館は重いものというざっくりしたイメージでやっていたが、実際やっていく中で簡単な区分ではないことが明確になってきた。この本はどちらが買うのか、このイベントはどちらがやるのかを、具体的に決めるにはもっと一緒に考えていかないといけない段階に入ってきている。

一番代表的なのは蔵書だと思うが、イベントだとか、どこら辺をターゲットにしていけるかを常に共有しながらやっていく必要がある。

他の社会教育事業とのコラボレーションとしては、新たな位置づけはしていないが、生涯学習課がやっている市民学校の一単元を地域資料の担当職員から説明を受けながら学ぶということ事をスタートさせている。去年からスタートさせて、とても良いから継続させようという動きになってきている。

デジタルミュージアムも生涯学習課の仕事だが、図書館の資料についてもデジタル化し、これからもより良い取組はできていくと思う。

出版事業に関しては、10～20 年前は図書館の資料を使って出版事業をやっていたが、このところできていないので復活させて行くのは難しいところである。地域資料の取組が充実する中で、新たな発信・出版ができたら良いと思うが、前段階のところから少し始めないと難しいのではないかと考えている。

〔野口委員長〕 紙での出版はコストもかかるので、電子図書館を推進していることを考えると電子書籍の形で市民に読んでもらうような提供の形もありうると思う。

## 5. その他

### 委員から質問①

〔大塚委員〕 東口図書館に本を探しに行くと、児童書コーナーは大人が座って本を読むのは禁止になっている。何か理由があつてのルールなのか伺いたい。

〔青柳東口図書館統括責任者〕 大人の方は入らないでくださいという言い方ではなく、子どものスペースだという表示はしている。以前、怪しい大人の方が入り込むことが何度かあったり、新聞を広げて読んでいるというクレームや問い合わせがあったりもした。大人が入ってはダメということではなく大人が座っていると気になるといった声があったので、子どものスペース、子ども専用の机・椅子という表示はしている。大人の方は閲覧席を利用してもらうようにしている。

〔佐次館長〕 大人が子どもコーナーの本を読むのはダメなのか。

〔青柳東口図書館統括責任者〕 大人が子どもコーナーで本を探す分には問題ない。職員が見回りや、配架もしているので怪しい人がいた場合は図書館員が行ったりしている。

大人が入る分には良いが、机には子ども専用ですという表記をするようにはしている。

〔野口委員長〕 子どもの本を読むわけではないのに、新聞を持って占拠してしまう方がいるということ。ほかの図書館でも同じ対応しているケースはある。

決して東口図書館が特別なことをやっているわけではないと思う。

〔大塚委員〕 借りなくても、別のところに持って行き閲覧するのは可能なのか。

〔青柳東口図書館統括責任者〕 子供の本を別の場所で読むことは可能である。

### 委員から質問②

〔植田委員〕 中央図書館に来たときは駐車場があるので手ぶらで行けるが、東口図書館には買い物をしてからいくことが多く荷物を置く場所があると良いと思う。

〔青柳東口図書 閲覧席の下にはカゴが置いてある。ロッカーみたいに鍵のあるものだと良い  
館統括責任者〕 が、そうでないと荷物を持っていかれたり、管理のこともあるので図書館員が  
いないところに置いてもらうには不安なところがある。

・事務連絡(石塚副館長)

次回の図書館協議会は、7月に開催する予定

## 6. 閉会

〔野口委員長〕 これをもちまして、図書館協議会を終了する。